



「新年明けましておめでとうございます」

「明けましておめでとうございます。」

古くから言い継がれてきたこの新年の挨拶には、どのような意味が込められていたのでしょうか。

日本という国は、これまで長い歴史の中で様々な戦(いくさ)、戦争を繰り返してきました。人々は、いつ何時(なんどき)頭上から降ってくるかわからない鉄砲の弾(たま)や爆弾に脅かされ、不安な毎日を過ごしていました。また、たとえどうにか逃げ延びたとしても、多くの人が飢えに苦しみ死んでいきました。このような暮らしの中で、「無事、年明けを生きて迎えられた。本当にありがたい。」と、人々が感謝の気持ちを込めて交わした挨拶こそが「明けましておめでとうございます。」なのです。

2024年の幕開けは、言葉では言い尽くせない痛みを伴いました。

正月の家族だんらんを一瞬にして悲痛な叫びへと変えた能登半島地震。1/10 午後の時点で206人の尊い命が奪われ、52人の方の安否が未だに分かっていません。また、被災地に救援物資を運ぶために羽田空港を飛び立とうとした海上保安庁の飛行機が日航機と衝突し、乗組員5名の命が奪われてしまいました。唯一不幸中の幸いと言え、379人の日航機の乗客・乗員全員の命が助かったことです。衝突後エンジンが炎を上げ、煙が機内を埋め尽くし機長との連絡が絶たれた中で、脱出の判断は全てCA(客室乗務員)に委ねられました。当然のことながら「早く外へ出せ！」と叫びパニック状態になっている乗客を目の前にして、CAたちは決して慌てませんでした。CAたちが「落ち着いてください。状況を確認しています。いったん姿勢を低くして、鼻と口を覆ってください。」と声をかけると、乗客は冷静になっていったそうです。指示を出すと同時に8か所ある非常扉のうち5か所から炎が出ているのを確認すると、すぐに残りの3か所から脱出用シュートターを出して乗客を誘導しました。その間、衝突からわずか8分。この迅速かつ的確な判断がすべての人の命を救ったと言われています。この時、世界中のメディアがこぞって「奇跡の脱出劇」と表し称賛しました。

ところが、それを聞いた現役のCAたちは「決して奇跡などではない。」と答えたそうです。「私たちは、緊急時に備えて一人一人が『非常時の担当扉』をもちます。『自分はこのドアの担当なんだ。何かあったときにはこうしよう。』と、意識をしっかりとって飛行機に乗り込みます。」「偶然や奇跡などではない。」と語ったあの確かな自信は、地震だけでなく空港内の不審物などさまざまな状況を想定して避難訓練に繰り返し取り組んできた経験から生まれたのです。今回、事故機の機内でCAがメガホンを手にチームワークを発揮し、あの短い時間で冷静に非常扉を選び、乗客全員を無事救出できたのは、まさに訓練の賜(たまもの)だったのです。

訓練によって救われた命、そして、今回の地震災害に遭わず新年を迎えられた命、どちらも「生きていられること」に感謝し、私たちに何ができるのかを真剣に考え共に行動しようではありませんか。



先輩の皆様、ありがとうございました

昨年11月17日、昭和31年度和光中学校卒業生同窓会の皆様より70,489円の寄付金をいただきました。

卒業から今日まで、同郷の絆を大切に育まれてきたそうです。後輩の子どもたちのためにと、同窓会会計担当の大矢順一郎様が来校されました。大切に使用させていただきます。ありがとうございました。